

ヨーロッパにおける農業技術の普及・試験研究・農業後継者育成にふれて

1983年10月

自治体職員海外研修団 中嶋 邦弘ほか

今回の研修は、ヨーロッパの秋を満喫する毎日だった。黄色く色づいたマロニエやプラタナス、アカシアなどが、芝生の緑に鮮やかに映えて美しかった。ナナカマド、コトネアスター、ピラカンサスなどの実物花木は、この季節ならではの見事な色付きであった。鋏と手先で仕立てる日本の庭園樹とは違い、木々を伸び伸びと大きく育てて眺めるヨーロッパの公園は、少ない樹種の植生をいかに大切に育てているかを思い知らされる。

私たちの訪ずれた機関は、イギリス農業訓練委員会、オランダ国立花き試験場、西ドイツ・バイエルン州立ランズベルグ農業教育センターである。通常の観光とは無縁の農村に出かけ、ヨーロッパ農業及び農村の実態にも触れることができた。農場で働く人々や農家の若者とも言葉を交し、人種、民族を越えた心と心の触れ合う交流を重ねることができ、今さらながら、目で確かめて手で触れることの大切さを知ることができた。社会体制や政治風土の違いはあるが、自からが提言し参画、財政負担もするヨーロッパの農家の行動力には驚かされる。

●イギリスにおける農業訓練委員会（ATB；Agricultural Training Board）の活動

ヨーロッパに着いて最初の訪問先である。事務所はサホーク州・ハーバーヒルにある。ロンドンから電車で2時間以上もかかるので、40分で行けるクリューズ駅で待ち合わせるようになった。出向えてくれたのは、昨年、日本で8週間研修し帰国したアグニュ氏(S.T.Agnew)と、彼の助言を受けながら農家指導に当たっている女性訓練官のハイワードさん(S.C.Heyward)の二人であった。駅からほど遠くない彼女のアパートの一室で説明を受けた。

ATBの緊要

ATBは、1966年に設置された政府機関である。イギリス本土を東部、西部、北部、スコットランドの四地域に分割し、園芸農家の指導に当たっている。彼等の事務所は、1978年に地域の園芸農家の間から農業生産や経営について、より高度な技術を勉強したいと政府に働きかけ設置が認められた。事務所には12名の訓練官が、ロンドン北部のリーバーン地方を地域分担している。彼女も訓練官の一人で、レタス、トマト、切花などの園芸農家60戸を受持っている。この園芸農家の中から8名が地方委員会に参加している。ATBは地方委員会により運営されていて、財政的には地方委員会7.5万ポンド、園芸農家4万ポンドを負担し合っている。



総指揮官のアグニュ氏と訓練官のハイワードさん

そしてA T Bは、園芸農家に対し次のような研修活動を行なっている。

- 農業経営技術についての研修
- 農業生産技術についての研修
- 管理職的な労務管理研修

研修内容によって1日、1～2日、2～3日、4日コースに分かれている。机上学習だけでなく農場で実技訓練も行なわれる。この研修会で実際に指導に当るのは、花や野菜の専門家である。この場合の専門家とは、大学教授、試験研究員、実際家（農場主）である。研修に用いる資料は100種以上の小冊子が準備されている。この資料作成は総括指導官のアグニコ氏が担当している。6名の専門家スタッフが彼を支援し、専門家スタッフに対しては、70名の専門家（大学教授、試験研究員、農場主）と70名の秘書が各種データや資料を整理し提供している。彼女のような訓練官は、農家を集めての研修計画を企画、立案し、専門家を雇って研修を行なう。そして、六週間のうちに一度は必ず担当農家を訪問することを義務づけられている。

イギリスの農業改良普及制度は、1972年に大幅な機構改革が行われ普及、試験研究、奨励行政を一体化した農業振興相談事業(Agricultural Development and Advisory Service)となっている。園芸農家のような常に技術革新の必要な農業部門では、現在の普及制度に飽き足らず自からの手でA T Bを設置させたと考えられる。

午後からは、ロンドン北部地域の施設園芸農場を案内してもらった。レタス専作農場、イスラエルなど国外にも販売する野菜苗専作農場、キクの切花専作農場、農家の手によるガーデンセンターいずれも創意工夫を凝らした生産施設や生産技術が駆使されていて、じっくり時間を費やして調査したいものばかりであった。



野菜苗を専門に育てているジョン・クーリー農場

●オランダ国立花き試験場における研究課題の決定法と研究成果の一家への伝達法

「オランダと日本との農業改良普及制度について話し合うことを期待します」視察依頼に対する返事である。農業改良普及員とも面談したいとの要請に答えて、場長のデュエスブルグ氏(Van Doesbrug)と専門技術員のグラス氏(J.J.Gloss)が出向えてくれた。

オランダの園芸に関する試験場は、花き試験場はアールスミアに、球根試験場はリッセ、野菜試験場はナールバイクに設置されている。設置されている地方は、それぞれの園芸部門の盛んなところで、これらの試験場はその地域の農業の方向づけに大きな役割を果たしている。

デュエスブルグ場長から、国立花き試験場の運営について説明を受けた。

80年前に・設立されたこの試験場は、逐次拡充がなされ室内環境を自由にコントロールできる2万平方メートルの温室施設が整備されている。農業学校、普及所が併設され、80名の研究員が試験研究に従事している。試験場の運営は全土から選出された20名の切花農家と15名の鉢花農家、研究員とによって行なわれる。研究費は年間525ギルダー、2分の1が政府援助、残り2分の1は花き農家、花屋、仲買人が負担している。花き農家は全土で8000戸、花の売上金から0.8パーセントを、花屋、

仲買人は別途徴収し、総額2000万ギルダを試験場に納入している。その用途は、262.5万ギルダを研究費に、1200万ギルダを花の消費宣伝に、残り537.5万ギルダを試験場運営管理費に充当している。

ここでの試験研究課題は、花き農家が何を研究してほしいかの意見を取りまとめて決めることになっている。試験場運営委員会が、その意見集約の場となっている。研究員としては、どれだけ研究成果が得られたかを証明すれば、農家はよろこんで研究費を支払ってくれるということである。国立試験場でありながら連邦政府からの研究依頼は一切受け付けていないということである。

場長の案内で場内を見学させてもらったが、コンピューターを利用した各温室内の環境制御と記録装置、ソイレスカルチュア・フオグシステム、品種比較、新しい花きの生理生態調査など、日本の農家にとっては興味深い先端技術の数々が、試験し展示されていた。



場長室でデュエスブルグ氏、グラス氏から説明を受ける
次いで専門技術員のグラス氏から研究成果の伝達方法について説明を受けた。

オランダの農業改良普及事業は連邦政府と州政府の両者により推進されている。連邦政府は全土をカバーする形で試験場の普及部に専門技術員を配置している。グラス氏もその一人である。各州には農業改善部があり、2～3カ所の地方普及センターを統括している。地方普及センターは4～5カ所の農業改良普及所から成っている。このように州政府による農業改良普及所は全土で150カ所、35カ所の地方普及センターが設置されている。

グラス氏の役割は、国内外の試験研究機関と密接に接触し各州の農業改良普及所に橋渡しの機能と市場流通情報の伝達機能を果たしている。同時に各州の専門技術員とも連携を図っている。重要な研究成果は必ず農業改良普及所をとおして農家に伝達する仕組みとなっている。農家向けの技術、経営、市場情報資料は農業改良普及員に指示して作成させる。そして、その1州のみで使用するのではなく、全国の関係農家に有料で配布するよう指導している。草花栽培の技術資料を譲渡してもらったが、内容は実によく整理された高度な専門書といった具合であった。研究員も年1回、研究成果を本にまとめて発表することになっている。国立花き試験場は年間に1～2回の研究施設の公開と品種展示、1～2回の講演会を催し直接農家と研究員との触れ合いを図っている。オランダの試験研究機関は農家が直接運営にも参加し生産や流通現場の問題を試験研究課題化するシステムが以前から定着しているといえる。

●西ドイツ・バイエルン州立ランズベルグ農業教育センターでの農業後継者育成

「ゲルテンドルフ駅で待ち合せしましょう」リター氏(Dr.Ritter)からの連絡で私たちは、ミュンヘンから快速電車で1時間、指定された終着駅に着いた。午後からの訪問で日暮の早いこの季節では、出掛ける頃からすでに夕暮を思わせる情景だった。彼は笑顔で私たちを出迎え、自家用車で20分農業教育センターに案内された。彼は、農業改良普及員であったが、今はこの学校の先生である。校長先生が出張中なので、彼が説明するということである。

西ドイツの農業マイスター制度

「連邦職業養成法」に基づいて、全産業就業者に職業別に与えられる国家認定資格で、農業マイスタ

ーは西ドイツ農業者教育の中心的役割を果たしている。農業マイスターになるには国民学校（わが国の中学校）を卒業後、マイスター見習試験を受けるために3年間、マイスター農家での見習いをしながら農学校（農業改良普及所）で毎週1日勉強する。さらに本格的な農業体験を積んで、そのうえに農業高等専門学校で1か年の学習期間を経て、はじめてマイスターの試験が受けられる。実に7年間の実務と理論を学ぶわけである。

マイスター農家には特典は与えられていない。彼等は、技術水準、経営能力が優れ、見習生を受け入れ、教育者、人格者としての社会的評価がよりどころである。見習生にとっては、直接生きた技術を学び取ることができ、農業後継者賛成に果す役割は火きい。

ランズベルグ農業教育センターの概要

150年の伝統ある学校で、州政府の農林省に所属する。バイエルン州には、このような教育機関が2か所に設置されている。他の1か所は北部のアンツバッハにある。教育内容は一般教養とあわせて、その地域の営農類型を主体に教育している。このセンターには多くの教育コースが設けられている。

農業単科大学は農業に関する理論や知識を勉強し、アドバイザーを養成する、農業技術者養成大学は、農作業の実際場面に役立つ実技的な教育を行なっている。農業高等専門学校は、農業マイスターの資格を得るための学校。その他2年制の農業技術者助手養成コースがある。



ランズベルグ農業教育センターでの家政科の学生たち

このように多くのコースに分かれているのは、学生の希望に応じて入学できるシステムになっているのだとのことである。

各コースを分類整理すると次のようである。

コース	入学資格	就業年限	定数
農業単科大学	実務学校卒業生	3か年	125名
農業技術者養成学校	実務学校卒業生でなくともよい	2か年	50名
農業高等専門学校	自由に参加できる学校で、農業改良普及所の教育課程を終えた者	1か年	40名

学生は授業料、教科書代は州政府が負担し無料、寮生のみ寮費を支払う。

校内施設を案内してもらった。家政科の実習室、家庭用台所器材の展示室、育児用具の展示室、農機具庫、理化学実験室、研修室を見学したが、驚いたことに学生の実習用器材や展示品は、全て新品で占められていた。先生方の話しでは、各メーカーが開発した先端器材や機具を、毎年教材として寄贈してくれるのだという。西ドイツの農業後継者養成は、教育機関、マイスター農家、農業関連産業などが、役割分担をしながら、社会が期待する若人を育てているといえる。